北から南から

住民と大学、小学校の地域ぐるみで行う
～子どもたちへの防災教育の取り組み～

宮崎市 中央西まちづくり推進委員会 理事
宮崎公立大学 人文学部 教授 辻 利則

1 はじめに

宮崎市立西池小学校区を含む「中央西地域自治区」は、宮崎市の中心を流れる一級河川大淀川の下流域に位置し、ほとんどが浸水想定区域になっています。過去に何度も内水被害を受けたこともあり、防災意識の高い地域です。

平成23年の東日本大震災をきっかけに、災害時に子どもたち自ら命を守る行動がとれるようにと、同年４月から地域内にある宮崎公立大学とまちづくり推進委員会が西池小学校と連携して、防災教育を進めています。活動名は「ストリートウォッチング」、令和２年で10回目を迎えます。

2 ストリートウォッチングの内容

ストリートウォッチングでは、（１）事前授業、（２）地域調査、（３）マップ作成の３つの活動を行います。対象は西池小学校の５年生（約150人）です。

（１）事前授業

大学生がハザードマップや地震の映像などを使って授業を行います。自分の住む家はハザードマップのどこにあるのか、川が氾濫すると５ｍ近く浸水することを知ると、子どもたちは、他人事でない我が事として真剣に考えてくれます。「災害時、どうしたらいいのか、避難場所はどこか、家の人に尋ねること」が大学生から出される宿題です。

大学生による事前授業

（２）地域調査

地域の危険箇所や災害時に重要な避難場所などを知るための調査です。地域住民、大学生、そして障がい者団体の方にも参加をお願いし、１グループ10人程度で調査をします。

出発前の打合せ

調査の途中には、施設を調査するミッションがあり、各施設の災害対策などを調べます。調査する施設には、公園管理事務所、幼稚園、福祉施設、コンピュータ企業、ガソリンスタンド、銀行、テレビ・ラジオ放送局、郵便局、ガス会社、交番、保健所、医師会館、消防署、ボランティアセンターなどがあり、グループごとに異なる施設を調査します。

公園管理事務所で説明を聞く子どもたち

（3）マップ作成

調査したデータは、Ａ０サイズの地図に書き出します。危険箇所や避難場所など子どもたちがメモした記録用紙と大学で開発したアプリを利用して撮影された写真、位置情報を確認しながら、地図を完成させます。写真は印刷して地図に貼り付けられるようになっています。

体育館でマップ作成

アプリの調査データと作成したマップ

3 地域ぐるみの防災教育

地域の宝は何かと聞かれて、「子ども」と答え、違うと言う人はいないでしょう。ストリートウォッチングは、そんな子どもたちを災害から守るために行っている活動で、保護者を含め、地域のだれもが子どもたちを守ろうと動いています。

事前授業で子どもたちに避難場所について考えてもらう宿題は、子どもに尋ねられた保護者が災害について考えるきっかけになり、避難場所の確認など、家庭で子どもを守る対策につながります。

地域調査の施設回りは、子どもたちの調査のためにと、地域の皆さんが協力施設を探してくれることで成り立っています。そして、一生懸命に話を聞く子どもたちの姿勢は、施設の人を本気にさせています。施設によっては、説明用の資料を準備し、普段は見られない耐震設備を見学させるなど、地域の人も初めて知ることがあるそうです。

大学生は、グループのリーダーですが、年齢が近いこともあって、子どもたちにいろいろなことを話しかけられます。子どもたちを通して、地域の方とも自然に会話が生まれ、話をするきっかけになっています。

ストリートウォッチングの「子どもを災害から守るための活動」は、子どもたちの活動を支えるための地域ぐるみの動きとなっています。それは地域住民の連携を生み、結局は「災害時の地域住民自身を守る取り組み」につながっていくでしょう。

4 おわりに

地域の共助は現在の社会では難しい取り組みですが、ストリートウォッチングのような子どもの防災教育は、住民の理解や協力も得やすく、地域ぐるみの活動がしやすくなります。毎年、元気な姿を見せる子どもたちのエネルギーは無駄にしたくないものです。

さて、今年のストリートウォッチング、コロナ禍の影響で中止も考えましたが、しっかり対策をした上で実施する予定です。リモート授業、子どもたちに iPad を持たせての調査など、新しい取り組みを考えています。